

氏 名	岸 博 之
国 籍 ・ 本 籍	岐阜県
学 位 の 種 別	博士（学術）
学 位 の 番 号	甲第243号
学位授与の日付	平成26年 9 月15日
学位授与の要件	名城大学学位規程第 3 条第 3 項該当
学 位 論 文 題 目	建築に見られる継承行動に関する研究
論 文 審 査 委 員	主 査 伊 藤 康 児
	副 査 田 中 義 人
	副 査 和 田 実
	副 査 木 下 栄 蔵

論 文 内 容 の 要 旨

I. 本研究の目的

継承ということば自体は受け継ぐという現象を表わしているが、継承という人の営みは、人に譲り渡す行為、人から受け取る行為を伴っている。行為の多くは、人間の意志が込められ、目的がある。継承は、何を人に譲り渡すか、また何を人から受け取るか、によってさまざまな表れをし、モノ、風習や言い伝え、伝統行事、建築物などの継承が、社会で広く浸透している。親から子どもへの住居や土地、金銭などの財産の相続や贈与は一般的に見られ、相続税や贈与税といった税制があること自体、その日常性を表わしている。伊勢神宮の式年遷宮は伝統行事に見られる継承であり、1000年以上も前から行われ、現在も受け継がれている。これにより職人の技術が前の世代から後の世代へ継承されている。（寺石，2006）また、皇位や王位の継承は身分の継承として、世界の歴史のなかで見られている。安藤（2013）は、私たちの身近なところのお墓の継承について調査研究を行い、お墓を受け取る側の若い世代にも「お墓は次の世代が継承する」といった意識を見出し、家族のメンタリティを繋げていく役割を果たしていると結論づけた。このように継承は、社会のなかで一般的普遍的な現象であり、国や地域社会の基盤を支えているといってもよい。本研究では、継承という現象を支えるものに、人の心理があるものと考え、なかでも建築物である住居や不動産の継承については、一生モノとか代々伝わるもの、守るものというようなことばで表されるように、そこには住まい手の欲求や意識、価値観が存在し、継承行動の現象として捉えることができる。では、なぜそのような欲求や価値観が生じるのであろう。本研究は、身近にある住居の改築行為とマズロー、A.H.（Maslow, 1970）の欲求階層理論から見出そうと考えた。それは、継承を実際の営みとして行う人間の行動や心理には、家族のあり方、生活スタイル、生活ステージ、家族の成長や変化、生活の拠点となる住まいのあり方などがかわり、住居の改築行為は、その現れの行動として捉えられることができ、動機性と意思決定に至る過程が比較的明快であ

と思われる点である。本研究は、継承欲求が生じる要因から継承の意思決定に至る構造的解明を目ざしながら、自身の住まいを改築（リフォーム）するといった行動が、継承行動の一つとして存在するとした人の心理を探究するものである。個人や家族が抱く価値観および家や財産、習慣、風習といった社会にある有形、無形の価値を、人の心理を通して後世に伝える構造を明らかにすることで、次の世代や環境に優しい社会を築くために寄与できるものと考えている。また本研究は、近年の少子化による人口減少と高齢社会化、建物の老朽化により住宅継承がなされないで空き家（平成20年現在、空き家数756万戸、住宅総数に占める割合13.1%）が増加し、その放置から地域の治安が悪化、災害による危険の増加によって地域価値の低下に至るといった大きな社会問題に対し、継承行動と住居設計のあり方からアプローチすることで、その解決策を見出そうとした。このように、本研究は人文科学的領域と工学的領域をオーバーラップさせた研究となっており、その意義は高いと考えられる。

II. 実証研究の概要

本研究は、大別して二つの研究で構成される。一つは、継承欲求の動因から意思決定（継承行動）に至る構造的解明研究であり、二つ目は、継承行動に関する意識研究である。

研究1 継承行動に至る構造的解明

（問題）継承欲求が行動へと動機づけされる要因に、価値観と意思決定の構造的な関連性を考え、岸（2010）が行った質問紙調査結果を再分析し、因子分析の尺度得点の出現傾向から、自我関与における心理的距離という概念を見出した。そこから自我関与の程度（距離の遠近）によって価値を判断する際に生じる心理的圧力があるとした価値判断距離と価値判断圧の関係と、マズローの欲求階層にも、人が抱く価値観によって表わされる心理的距離（基本的欲求間距離）があるとして、欲求（価値）を選択する価値選択圧との関係を予想した。またこれらを意思決定の基本的構造とすることで、意思決定を数理モデルにした「決まるモデル」と「決めるモデル」（木下, 2006, 2009）との関係を考察したが、心理的距離と心理的圧力の関係実証が課題として残ったため、（本研究第3章「マズローの欲求階層理論と意思決定の研究」）本研究第4章にて、その実証を試みた。

（方法）具体的に心理的距離や心理的圧力がどんなものかを示すために、一対比較の尺度自身が自我関与への程度を示すものであると考え、第3章と同様に質問紙調査で用いたAHP（分析）から、一対比較尺度頻度数と整合度C.I.の相関測定および基本的欲求重要度と代替案一対比較尺度頻度数の相関測定を試みた。

（結果）いずれも強弱の程度はあるものの、それぞれに相関関係が認められた。

（考察）

- 1) 人の心理は、自我関与が高いほど価値を認める傾向は高くなる（価値判断圧が高い）が、圧力錯誤が増加し、判断（意思決定）の一貫性を欠く可能性がある
- 2) 一対比較の“同じくらい重要”という尺度を選択したときの価値判断距離は、他の尺度と比較して最も遠くに位置する可能性がある。（最も遠い自我関与距離にある。）

これらより継承行動は、動因から自我関与による価値判断圧および基本的欲求の価値選択圧を介し意思決定に至る基本構造の存在を考察した。（本研究第4章「距離概念としての価値観と意思決定の基本構造に関する研究」）

研究2 継承行動に関する意識

（問題）わたしたちは、先人や先代から受け継いできたものを物心ともに生活の中に多く所有し、それは時代が変わっても使用され続けられるものや、次の世代にも受け継ぐべきものがあり、わたしたちが育った地域や場所に住み続けることや、財産（住まい）を受け継ぎ維持していくことなど、生存、生活のための継承行為における生活の場を変える行動契機として現れる現象が、居住の改善といった継承行動であると本研究は考えている。したがって住居の改善、身近では部屋の改善に至る人の意識や価値観を調査することが継承行動の解明につながる。

継承行動は、継承する人、される人の価値観および移り変わる時間を考慮した価値観を検討しなければならない

い。それは、継承対象となる事柄やモノなどに対する価値観が近い未来や遠い未来の状況を想定して生じている可能性がある。そこで本研究は、Heidegger (1927) の、道具がもつ本質から、備え、保管、配置、用意されるといった、その行動から人の存在を見出したとする考えより、人は日常的に使用するモノや道具を、次に使うために例えばどのように置き、収納されるかなど、意識的な状態や無意識な状態でも次の行動に備えるための行動ができ、かつその行動は自身が分かっているという能力の行動了解性を予想した。そこで本研究は、現在住んでいる住居を子や子孫へ譲り渡す行為、結婚や子どもが増えることで住居を改善する行為、家族のために今以上の住み心地の良さを求めて行う住居改善などは、将来を見据えられるある程度の年齢を重ねた人たちが行える行為として、そこに継承意識との関連性を考えた。これには継承がどうすると価値観として現れるのかといった、行動了解性を含めた検証や居住への感情である住み心地と継承意識との関連性の検証、および継承意識の芽生えは、ある程度の年齢を重ねた人なのかどうかの検証を質問紙調査により行う。

(方法) 大学生 365 名を対象に、下記の 4 つの質問項目より構成される質問紙を用いて調査を実施した。調査にあたっては、本学倫理委員会の承認を得た。

1) 生活や生活の回りにあるモノや部屋についての考えに関する質問

普段の生活のなかの身近な行動を想定し、次にしようとする行動につながる前行動をたずねる質問を中心に、行動了解性の備え行動として想定した準備行動、確認行動、習慣行動、整理行動を意識として見出し、継承行動の意思決定への関連を調査する項目群。

2) 部屋の改善についての考えに関する質問

日常生活のなかでの模様替えやリフォームを行う心理がどのようなものであるかを探索するために、部屋の広さやホームセンター、身近にあるモノや家具、雑誌などのキーワードを想定し、模様替えやリフォームをイメージし易い質問を中心に、模様替えやリフォームなどによる部屋の改善行動が、継承行動につながる際の住まい手の意識や価値観をたずねる項目群。

3) 家やモノの継承意識についての考えに関する質問

生活のなかで家やモノの継承について、習慣や価値といった直接的な言葉を使って意見や考え方をたずねるもので、生活のなかで身近に感じられる家やモノについての継承意識や継承価値観といった、継承行動に至る直接的な意識をとらえる質問群。

4) 住み心地の良い家についての考えに関する質問

家の継承には現在住んでいる住居への思いが関連していると考え、住居の住み心地についてたずねる質問を行った。住居への思いとは、そこで暮らすまたは暮らした家族のことや近隣との関係、自身が理想とするようなライフスタイルやそこで過ごした思い出、住居（建物）への満足、不満など、住まう人の生活場面においてさまざまな場面である。よって人が住み心地を感じるさまざまな場面を想定し、住居の住み心地と継承行動の関連分析に必要な、住み心地感をもたらす意識を特定する質問群を用いた。

(結果) 回答を数値化し、因子分析またはクラスタ分析を用いて項目のまとまりを確認した後、クロンバックの α 係数を算出して信頼性分析を行った。それぞれの尺度ないしは、クラスタの命名は下記のように行った。

- 1) 普段の生活でモノや部屋にかかわって次にしようとする行動に関する質問は、2 つのクラスタをなしており、行動了解性を構成している備え行動の整理・習慣、準備・確認とそれぞれ命名した。
- 2) 部屋の模様替えやリフォームに関する質問は 1 因子を構成しており、居住改善志向と命名した。
- 3) 家やモノの継承意識についての質問も 1 因子を構成しており、継承価値観と命名した。
- 4) 住み心地の良い家についての質問は 3 クラスタをなしており、だれもが求める住み心地、環境（庭）がもたらす住み心地、デザイン・設備がもたらす住み心地とそれぞれ命名した。

これら七つの意識因子それぞれの関連を検討するため、1. 意識因子間の関連分析、2. 意識因子間のグループ形成と意識程度分析、3. 特定意識因子間の因果関係分析、4. 特定因子間のグループ形成と意識程度分析を行い、次

のような結果・考察を得た。

1. 意識因子間の相関分析を行い、継承価値観は住み心地を希求するまたは志向する意識によってもたらされている、整理・習慣意識は居住改善志向に向かう、準備・確認意識は住み心地感によってもたらされている、居住改善志向にある人は住み心地とりわけデザイン・設備がもたらす住み心地を求めていると推察できた。
2. 継承行動に至る七つの意識の尺度得点すべてを用いて回答者をターゲットとするクラスタ分析を行ったところ、尺度得点のいずれもが高いグループ（96 人）、中程度のグループ（137 人）、低いグループ（99 人）にほぼ均等に分離、全体の 1/3 弱が高い意識（平均値は 5 点尺度の 4.26）をもち合わせていると推察できた。
3. 継承につながる直接的因子と考えられる準備・確認、居住改善志向、継承価値観同士の相関が低く、継承を促す仕組みが明確でないため、従属変数を継承価値観、独立変数を準備・確認、居住改善志向とした重回帰分析を行ったものの、明確な因果関係は示されなかった。
4. 重回帰分析から因果関係が示されなかったことから、継承価値観に影響をおよぼす要因を段階的に検討するため、明らかに相関関係が低い準備・確認、居住改善志向、継承価値観の意識因子の組合せにおいてクラスタ分析および分散分析を行ったところ、居住改善志向が積み上げられて継承価値観が現れる可能性が考えられた。これを更に検討するため、継承価値観に影響が考えられる準備・確認と居住改善志向をクラスタ分析し、そのクラスタに対して継承価値観の尺度得点平均値の差を分散分析した結果、居住改善志向は明確に尺度得点平均値が高得点、中得点、低得点の各グループに分類でき、居住改善志向が積み上がり継承価値観へ影響を及ぼしていると判断できた。これを検証するため継承価値観を交えて分散分析を行い、居住改善志向が、準備・確認と相まって継承価値観を押し上げるといった層の存在が推察できた。

（考察） 質問紙調査から、生活や生活の回りにあるモノや部屋についての考えから整理・習慣、準備・確認といった意識因子、部屋の改善からは居住改善志向、考え方からはだれもが求める住み心地、環境（庭）がもたらす住み心地、デザイン・設備がもたらす住み心地といったように、得られた継承行動につながると考えられる次の七つの意識因子を特定することができた。さらに、大学生という若い世代においても継承価値観をもっていることが判明した。

これらの意識因子相互の関係としては、継承価値観には、住み心地観（だれもが求める住み心地、環境がもたらす住み心地、デザイン・設備がもたらす住み心地）が影響し、また行動了解性の意識因子である準備・確認はだれもが求める住み心地観やデザイン・設備がもたらす住み心地観に、居住改善志向はデザイン・設備がもたらす住み心地観にそれぞれ影響していた。ただし、継承意識が改築の価値観に単純に直結していると言い切れず、居住改善志向が、準備・確認と相まって継承価値観を押し上げるといった層があると推察された。

Ⅲ. 総合考察

（継承行動にいたる意識と意思決定） 質問紙調査の結果から、継承行動に至る人の心理は、相互に関連する意識、継承行動に、自我関与する価値判断距離によって生じる価値判断圧、および基本的欲求間距離で生じる価値選択圧、行動了解性からなる意思決定の基本的構造を捉えることができた。

質問紙調査からは、大人になろうとする期間である青年期にある大学生の意識のなかにも、継承が位置づけられていることが示され、この結果は安藤（2013）と同じである。ただし、継承価値観と準備・確認の意識因子をもつ行動了解性との関連が薄かった結果からは、先（将来）を見通すレンジ（範囲）が限られている傾向もうかがわれ、大学生にとっては、青年期の発達課題である社会の自立が優先し、継承が関心ごとではないことも推察された。このことは、継承価値観にも発達のプロセスがあり、エリクソン（1973）のいう青年期にある大学生が、肉体的には成人だが、まだ自分をつくる世代であり、大人になるためのモラトリアムであることに結びつけられる。よって今後の課題として、マズローの欲求階層、行動了解性、および継承意識についての質問紙調査を、世代を異にする対象者に実施して、結果を比較検討することが必要である。

【AHPの有効性】一対比較という回答者本人も必ずしも明確に自覚していない心理を把握する方法を用い、意思決定を支援する指針を提示できる AHP は、本研究で明らかにしたとおり、回答の一貫性判定や尺度の選択頻度数の傾向から心理的圧力を捉えることができ、回答者の重要度（価値観）をとらえる上で有効である。

ただし、一対比較は比較対象のペアすべてを順次提示して回答者に判断を求めるため、比較対象の数が増えるとペアの総数も大幅に増え、そのため対象者への負担も増す難点もある。そのため、今後の課題として、AHP に用いる比較対象の数を抑えつつ、建築設計に生かす工夫が求められる。

【住宅設計への応用】現在居住している住宅を改築（リフォーム）する施主が次の世代への住居の継承を明確に意識して住宅設計を依頼する建築士に要望を伝えるとは限らない。そこで、施主と建築士がパソコンを用いてやり取りする場面での利用を想定し、本研究の成果と AHP の手法を取り入れたパソコン上で動くソフトウェアのプロトタイプを制作した。これは、施主に一対比較を主とする一連の質問を提示し、その回答から施主のいざいっている意向を解の形で具体化し、これをめぐって施主と建築士がさらにやり取りを重ねるなかから、施主が真に満足できる住宅設計に建築士が近づけるよう支援するツールである。このソフトウェアの質問には、住み心地の良さや継承をも質問に組み込んでおり、このソフトウェアの利用実績を重ね、施主の満足を検証のひとつの指標として工夫改善していくことも、本研究の発展的な課題である。

【引用文献】 安藤喜代美(2013). 現世代家族における墓制と葬送 その構造とメンタリティの変容 学術出版会 / Erik H. Erikson (1967). *Identity: Youth and Crisis* W. W. Norton (E.H.エリクソン 岩瀬庸理訳 アイデンティティ 青年と危機 金沢文庫 / Heidegger, M. (1927). *Sein und zeit.* (ハイデガー, M. 桑本務訳(1960,1961,1963). 存在と時間 (上,中,下) 岩波書店 / 木下栄蔵 (2006). よくわかる AHP - 孫子の兵法の戦略モデル オーム社 / 木下栄蔵 (2009). 事例から学ぶサービスサイエンス - サービス価値計測法10の事例 近代科学社 / 岸博之 (2010). 住宅の改築に見られる継承意識の研究 名城大学大学院総合学術研究科修士論文 / Maslow, A.H. (1970). *Motivation and personality 2nd ed.* Harper & Row. (マズロー, A.H. 小口忠彦訳(1987). 人間性の心理学:モチベーションとパーソナリティ 産業能率大学出版部) / 総務省 平成20年住宅・土地統計調査 (速報集計) 結果の要約 / 寺石悦章(2006). 伊勢神宮の庶民性と式年遷宮 四日市大学総合政策学部論集, 5(1/2), 129-138

論文審査の結果の要旨

土地や財産、風習や伝統行事など、さまざまなものが子や次世代に継承される。本論文は現住する住居を改築して子や孫に継承しようとする行動に着目し、(1) 住居の改築を志向する壮年世代から得られたデータを集計・分析して、施主の改築をめぐる価値観と意思決定の基本的構造の一端を明らかにした研究、および(2) 改築の前段階と考えられる物の整理や部屋の模様替えについての意識と継承意識との関連を大学生を対象に質問紙調査により検討した研究からなる。

(1) 施主の改築をめぐる価値観と意思決定の研究では、マズロー、A. H. の提唱する基本的欲求の階層説を施主の改築志向に当てはめ、一対比較により得られた回答データを AHP (Analytic Hierarchy Process) と呼ばれる階層分析法により処理している。このなかで、価値観や欲求を重要と判断する程度が高いほど判断にかかる心理的圧力の変動が大きくなるために判断相互間の一貫性が下がる可能性を示し、意思決定に至る基本的構造の一端を明らかにした。これらの成果は国際学会の学術誌とシンポジウムにて英文で発表されている。

(2) 継承意識との関連が想定される諸要因との関連を探究した研究では、身の回りの物の整理と準備、居住改善（模様替えなど）への志向、住み心地の良い家が備える特徴、および継承価値観といった心理要因を把握し、それら相互の相関関係を中心に検討したところ、明快な関連は見いだされなかったものの、回答者をグループ化した分析からは、物の準備と居住改善志向とが相まって継承価値観を高めている回答者のグループを見出している。また、継承価値観の平均値は高く、大学生といった青年世代も継承に価値を置いていることが示された。

社会の諸側面に広く見られる継承を心理面から探究した研究は、国内外を博搜してもきわめて少なく、継承をめぐる人文学研究として、本論文は貴重である。また、現住する住居を改築して子や孫に継承しようとする行動についての研究は見当たらず、住宅改築の設計現場に成果が生かされる建築の実学研究としても、その意義は高い。施主がパソコンから提示される質問と一対比較に回答すると、施主の価値観や欲求が数値として表示されるソフトウェアも試作しており、その改良・実用化も待たれる。

これらの意義を有する本論文は、学位論文としての条件を備えていると評価できる。従って、学位を授与することを妥当なものと判断する。